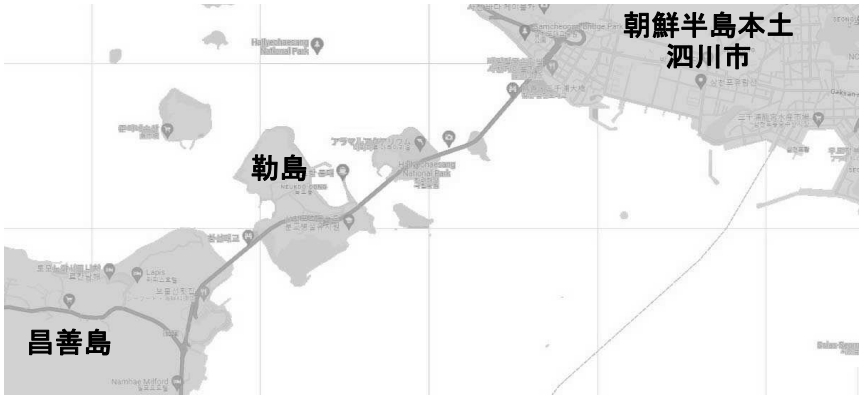
事務局 amateur スタッフによる**フォロー・アップ メモ・ランダム**

“魏志倭人伝の頃の韓半島情勢” にて

ヌクト(勒島)の名は、当塾では聞き慣れた、朝鮮半島にあった三韓時代の遺跡です。朝鮮半島には汝矣島(ヨイド)など、島でなくても島の字が付く地名はありふれているので聞き流していましたが、今回その全景写真が出てきました。勒島は紛れもなく島でした。改めてグーグルマップで示したのが下の図です。北東の対岸は半島本土で僅か1kmほどで、南西にある昌善島までは数百mしかありません。広さは妻木晩田遺跡の1/3より小さな島ですが、製鉄施設には適した立地だと思います。



当時作り出される鉄製品は誰もが欲しがっていたもので、魏書東夷伝弁辰条にも、弁韓内だけでなく、馬韓や濊や倭が買い漁っていた様子が書かれています。原料の鉄鉱石も、燃料の木炭も海上輸送で大量に運び込まれ、本土沿岸や昌善島に備蓄されて、製鉄炉は計画的な生産活動が可能だったのでしょう。できた鉄は本土に陸揚げされて、商業的な取引が行われていたと思われます。中には取引条件が折り合わず、強奪を企む輩もいたかも知れません。しかし海上にある離島ならば平気です。なぜなら海上を襲ってくる強奪者が、島に近づく前に発見して対処することができるからです。そのための防衛隊や見張りも、対岸の本土や昌善島に待機していたのかも知れません。

村上先生の講座では、中国後漢代の製鉄炉遺跡として、古石山遺跡のお話しがありました。地上にそびえるような巨大な復元予想は、世界遺産に登録された萩の反射炉を連想しました。そして高融点の鉄を作り出すには、相当大掛かりで、且つ緻密な仕掛けが必要ではないかと考えていました。しかし、調べてみると幾例かの教育関係者が、生徒や同好の士など20人前後の協力者とともに、砂鉄から鉄を作ることに成功しています。必ずしも高融点であることだけが、施設の大型化を促すわけではないようです。

しかし、勒島遺跡を地理的にみると、単に製鉄施設に留まらず、原材料や製品の保管、或いは管理・防衛などを含めた製鉄に携わる人の数が相当いたことが予想されます。

山口県萩市　史跡萩反射炉

島根県雲南市では標高約350mの谷間に、高殿や元小屋、米倉、炭小屋のほか、25軒の民家で構成された“菅谷たたら山内”が修復されています。明治18年の記録によれば、山内の人口は34戸、158人であったといいます。時代は異なりますが、勒島遺跡も同様か、或いはより大規模だったかも知れません。

たたら製鉄では、“村下(むらげ)”と呼ばれる技術責任者が製鉄作業全体を統括し、原材料の品質確認などにも“村下”は立ち会ったでしょう。しかし、取引相手との交渉や流通手段などの‘調達’に関しては、より階層の上の人が執り行なうことで“村下”は生産に集中できたと思います。生産や原材料の運搬の‘安全’を確保する集団もいたはずです。これらの人々がその役割に専念するには、食糧生産を兼ねられません。製鉄やそれに連なる作業の従事者に、安定的に食糧を調達するには、外部と随時取り引きするよりは、食糧提供を約束している農耕集団を仲間に加えることです。また、狩猟や漁労を生業とした集団にも広がります。このような階層の深い成熟した社会環境の中で、製鉄作業は行われていたのではないでしょうか。

ところで、邪馬台国大和説に立てば女王卑弥呼は九州北部を始め、瀬戸内海の山陽や四国北部、そして大阪湾沿岸から金剛・生駒山系を越えて奈良盆地一帯の広大な領域を統治しているはずです。しかし、その何れの地でも鉄を生産できていません。一般に列島内で鉄生産が始まったのは6世紀後半と言われています。磐井の乱が鎮圧され、継体天皇が畿内に落ち着き、仏教が伝来する頃になってやっと自前の鉄が生産できるようになったわけです。逆に言えば、社会がそのくらいに成熟しなければ鉄生産はできず、鉄生産ができなかった弥生時代晩期の倭人社会は、半島や大陸よりずっと未熟な段階にあったのではないでしょうか。大和から九州までを統治できる社会でないとしたら、大和説は成立しないのではないでしょうか。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集（体裁は自由ですが、文書でお願いします）